

浮世絵と描かれた江東②

浮世絵の発展と錦絵

江東区深川江戸資料館

浮世絵とは、江戸時代に発展した絵画のことで、「浮世」すなわち当世の風俗を題材に描かれているものを指します。現在、わたしたちが「浮世絵」と聞いて思い浮かべる作品は、葛飾北斎の「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」や喜多川歌麿の美人画、歌川広重の名所絵など、浮世絵のなかでは多色摺木版画の「錦絵」と分類される作品です。

本号では、浮世絵の発展と錦絵の誕生について、その技法や色の変遷、錦絵の概要を中心に紹介します。

1. 手彩色から版画へ

浮世絵は、肉筆風俗画と呼ばれる掛け軸や屏風などに描かれた1点物の絵画と、江戸時代の印刷技術の発達に伴う木版挿絵本（木版画）の流行により、誕生しました。

江戸時代前期に誕生した浮世絵版画は、その需要が高まるに従って新しい技法が次々に取り入れられ、技術が発達するとともに色が変遷し、発展したといえます。

(1) 墨摺絵

墨摺絵は、最も早い浮世絵版画の様式で、延宝年間（1673～81）頃より制作されました。これは、墨一色で摺られた版本の挿絵から始まったものです。初期は、版本1冊につき数図であったのが徐々に多くなり、後に挿絵の部分が独立し、12枚1組を標準とした版画として発展します。さらに、元禄7年（1694）頃には、一図で完結させる一枚絵（一枚摺）が単独で売りに出されるようになります。主として輪郭線の墨だけが木版で摺られ、その題材には遊里や芝居町が取材され、遊女や役者の全身像が描かれています。

上図は錦絵誕生以前に活躍した絵師である奥村政信（1686～1764）による墨摺絵の一つで、筆や版画による彩色はされていません。

政信は、柱絵（縦長の浮世絵）の考案や、遠近法を浮世絵に取り入れた浮世絵を始めた人物として知られています。



奥村政信「浮世花見車」
正徳期（1711～16）頃 太田記念美術館蔵

(2) 丹絵

丹絵は、墨摺絵に丹という朱色の絵具を主に用いて筆で彩色したもので、元禄～正徳年間（1688～1716）頃に多く制作されました。これは、それまで墨摺一色で表現された版画に単純な筆彩を加えるようになったもので、鉱物質の「丹」（酸化鉛）を主色として用いたため「丹絵」と呼ばれました。墨摺絵に、丹を主色に緑色や黄色などの筆彩をほどこして描かれました。

(3) 紅絵

紅絵は、墨摺絵に植物性の紅花からとれる紅などを筆で彩色したもので、享保～元文年間（1716～41）頃に制作されました。紅の使用に伴い、ほかの色にも植物性の絵具が用いられ、筆彩も丹絵のときとは異なり丁寧に塗られるのが特徴です。

紅絵と同時期に、紅絵の墨部分に膠分を多く含む「漆墨」を用いた漆絵も制作されました。その技法は、膠を混ぜた墨を筆で塗り重ね漆のような光沢を出すものです。漆絵は、寛保～延享年間（1741～48）頃まで制作されました。

(4) 紅摺絵

紅摺絵は、墨摺絵に紅や草色など2、3色程度を筆ではなく版で摺り重ねたもので、延享～宝暦年間（1744～64）頃に制作されました。これは、手で彩

色する手間を省くため、色も版木を用いて摺ることが試みられるようになったことが背景にあります。

この様な色摺絵が誕生した背景には、画面の欄外下方2か所に「見当」と呼ばれる印を付け、それを目印に色版を正確に重ねる「見当法」ができたことが大きな画期としてあります。

その後、7～8色以上の様々な色を重ねる多色摺の版画である「錦絵」が誕生します。

2. 錦絵の誕生

(1) 錦絵

浮世絵に多色摺が導入されるきっかけとなったのは、明和期(1764～72)の初め、武家や裕福な商人の趣味人たちを中心に、私的な摺物である絵暦の交換会(大小会)が流行したことです。太陰暦(月の満ち欠けの周期を基にした暦)を用いていた当時、大の月(30日)と小の月(29日)があり、年ごとに替わる月の大小を絵の中に示した摺物が絵暦です。

絵暦交換会を先導していたのは、禄高1,600石の旗本大久保甚四郎忠舒(俳名、巨川)で、巨川とその仲間たちは資金を気にすることなく絵師や彫師、摺師を動員して美しい摺物を制作しました。用紙にも上質で厚手の奉書紙を用いることで、色版を何版も重ね摺ることが可能になります。そして、より、色数の多い凝った摺物を求めた結果、多色摺木版画技法が飛躍的に発達しました。この絵暦の制作に最も頻繁にかかわったのが鈴木春信(1725?～70)という絵師でした。

多色摺木版画は、この時、江戸で生まれた錦織のように美しい絵、という意味をこめて「吾妻(東)錦絵」と称されます。錦絵は、版元がプロデューサーとなり、絵師や彫師、摺師の共同作業で完成します。この制作過程を経て、広く人々の手に渡ることとなります。

(2) 鈴木春信

春信は、浮世絵師として当初、細判紅摺絵の役者絵などを多く手掛けていました。そして、明和期初めの絵暦交換会流行時に、裕福な趣味人の依頼によって摺物を多く手掛けるうちに、美人画風を完成させます。これらは、比較的裕福で教養のある享受者層を想定して制作されていました。

また、可憐な美人画を描くことでも知られており、とりわけ美人で評判の實在した娘を描いています。明和5年(1768)頃より、江戸の町の当世を題材と



鈴木春信「笠森お仙」
明和年間(1764～72) 東京国立博物館蔵
Image: TNM Image Archives

して取り入れることが多くなってきて、谷中笠森稲荷の水茶屋「鍵屋」のお仙や浅草寺境内の楊枝屋「本柳屋」のお藤など、実在の人物や江戸の実景を描いた作品が多くあります。お仙とお藤、そして浅草の二十軒茶屋の水茶屋「蔦屋」のおよしを加えて明和の三美人とも呼ばれます。

上図は、笠森稲荷の看板娘のお仙を描いたものです。朱い鳥居、杉の木、小袖の蔦の紋は、笠森稲荷門前の水茶屋の看板娘であるお仙のシンボルです。お仙を描いたものはよく売れ、春信は相当点数の錦絵にお仙を描いています。他にも、吉原や品川の遊女を名前入りで錦絵に登場させる等、多くの人が興味をもつ主題を選び、錦絵の購買層を拡大させたといえます。

浮世絵(錦絵)は、技法の発展を背景に、その後、鮮やかな色彩や主題の多さ、大量生産が可能で安価で手に入ることから庶民の間に広がっていきました。

(松本智恵)

【主な参考文献】

小林忠、大久保純一『浮世絵の観賞基礎知識』(至文堂/1996)

小林忠『浮世絵の歴史』(美術出版社/2007)

(公財)太田記念美術館 監修『ようこそ浮世絵の世界へ』(東京美術/2019)